
俺達と私達の最幸な世界

ていん？がー！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達と私達の最幸な世界

【Nコード】

N1632X

【作者名】

ていん？がー！

【あらすじ】

どうも、元ていんがです。

色々な不都合により、前IDからのログインができなくなったのでこうして新しいIDを作ることになりました。

それとこの話は未知による不条理に基づく存無し（ワールドレス）のお話の内容に少し手直しを加えた上で前作のPROLOGUEから更新していきます。

ですので前作の未知による不条理に基づく存無し（ワールドレス）のお話を読んでいただいてる皆さんもこちらのほうをお読みください。

こんなことになってしまいましたが応援のほうをよろしく願います。

第零話『君の正体について』

【ここは、どこだ？】

俺は生暖かい液体に包まれてる中、意識を開いた。

目を開けようとしても開けることができず、体もうまく動かせなかった。

俺は何がどうなっているか理解できずにいると

「レガ…アナタ…コビ…ラバ…ハ、ソノ…ヲミタ…シヨ
ウ…」

【グウウウツツ！？】

割れるような痛みが頭を襲うと同時に断片的に誰かの声が頭の中に響いてきた。

《おやおや、もう『それ』がきてるのか。気の毒だね。》

【…誰…だ？…】

痛みに悶えていると、頭の中にさっきの声とは違う声が聞こえてきた。

《これは失礼した。私は世界を司り、管理をする者。》

【…神…様？…】

《ああ、そうか。君はまだ産まれていないからまだ知識はないんだったね。仕方ない、君に教えなければならぬことがあるが、それは君がもう少し大きくなってから言おう。ああ、そうだ。最後にひとつ、これを忘れないかどうかはわからないが、君の正体について教えよう。》

【…俺の…正体？…】

《そつだ。君は^{ノットイコール}普通^{ノーマル}でも特別^{スペシャル}でも異常^{アブノーマル}でも過負荷^{マイナス}でもなく、ましてや悪平等でもない。

君は

^{ワールドレス}無存現だ。《

【俺は…^{ワールドレス}無存現？】

《そつだ。君は…ああ、もうこんな時間か。悪いが、君はもうすぐ産まれる。せいぜい頑張れたまえ。》

【ちょっと待てっ！無存現ワールドレスとは何なんだ！？】

《もう時間がないから詳しくは言えないが、無存現ワールドレスは存在するはずのないものだ。》

そう声が言い終わるかどうかの瞬間

俺は後ろの壁に押し出され、そのまま狭くも暖かい道を通ると
さっきよりも広い空間に出たと同時にたくさんさんの声が聞こえてきた。

第一話『君をほっておけなかったから』（前書き）

更新遅れてすいません（T―T）

次は検定試験があるので更新は12月の中旬ぐらいになります…

ちよっ！？マジだよ、マジー！

第一話『君をほっておけなかったから』

「はあ〜。」

まだ昼下がりあまり人気のない公園のベンチにて銀髪のウルフル
ツトの少年

おこがえり はがり
御幸返芳賀裏2才はため息をついていた。

普通、人気のない公園で幼い子供がため息をついていたら、
友達がいらないから寂しい、親が構ってくれないから寂しいなど、何
かしらの悩みを抱えているのだろと思うが、彼には友達がいな
いどころかたくさんいて、両親も彼にたくさん愛情を注いでもらい、
何不自由ない生活を送っている。

では彼はどんな悩みを抱えているのか。

それは

『思い通り』になるからだ。

昔から彼の周りには不思議なことが起こった。

彼が今日の晩御飯はハンバーグが食べたいと思えばその日の晩御飯にハンバーグが出たり、友達が欲しいと思うと自然と友達ができたり、もっと親に構って欲しいと思うとその日から彼の親はより一層彼に愛情を注いだ。

彼は最初は嬉しく思ったが、だんだんと自分の『思い通り』になることにつまらなさを感じていった。

自分が何かを願うとその通りになる。

『思い通り』に願わずにいようと思ったことは何度があった。

しかし、芳賀裏はそれを実行出来なかった。

それを防ぐにはみんなと同じじゃなくちゃならない
みんなと違ってはならない
みんなより突き出てはならない

だから、芳賀裏は一人ぼっちにならないためにみんなと同じ普通^{イーマル}を
演じて演じて演じ続けた。

それ続けていく内に芳賀裏は本当の自分の気持ちを出すことを忘れ、心に思うことすら忘れてしまい、
いつしか上っ面の気持ち（うそ）と無感情だけが残った。

しかし、そこから変わりたいという気持ち（ほんとう）が上^う辺^そまじりにも浮き出たこともある。

しかしその反面、諦めて思い通り（このまま）でもいいとも上^う辺^そまじりに芽生えてきていた。

そう……

これからの人生は思った通りのものだけにしかないだろう。

まだ幼い彼はそう結論づけ

思った通りに友達と遊んで、

思った通りに親に愛情を注いでもらい、

思った通りに思い通りの何の奇跡も変哲もない日々を繰り返していた。

「……………帰るか。」

そう呟くと芳賀裏はベンチから立ち上がって、帰ろうと歩き始める。

が、その瞬間。

「気持ち悪いんだよっ！……！」

ガッ！！

芳賀裏が公園から立ち去ろうとした時、公園の奥側から罵声と共に硬いものが何かにあたった音が聞こえた。

この音に芳賀裏は歩を止めたのだが

芳賀裏は正義心や心配に思っ止まった訳ではない。

ただ

期待したからだ

芳賀裏は今の生活（思い通り）そのものが変わることはどうせない、とすでに諦めていたが、この苦しみ（思い通り）をほんの一瞬でも和らげれたら、とこの先の出来事に淡く期待を寄せた。

芳賀裏が罵声が聞こえてきた場所に駆けつけると
そこには芳賀裏より年上らしい少年達数人が芳賀裏と同年代である
う少女を囲んで少女に石を投げつけていた。

少女はうずくまっていたので顔はわからなかったが、毒々しい赤い
リボンのついたふわふわとした短いピンクの髪はリボンごと砂と埃
にまみれ、身に付けている可愛らしいワンピースも同様に汚れてお
り、さらに透きとおるように白い肌は至るところにあざがあり、血
も流れているところを見ると石を投げつけられていただけでなく悲
惨な暴行を受けていたのだらう。

すると少年達の内の一人が芳賀裏に気付いた。

「何だよ、お前？」

そう言われると芳賀裏は無表情のまま

「俺は御幸返^{おこがえり}芳賀裏^{はがり}だ。

お前ら、その子に何してる？」

とだけ返した。

「あ？こいつが『化物』だからに決まってるだろ？」

ピキッ

「……………化物……………」

「そうだ、こいつが同じ場所にいるだけで吐き気がする！それにこいつが手で触ったら何でも腐っちまうから気持ち悪すぎるんだよ！！」

そのために俺達は『化物』退治をしてるのさ！！
こんな風になっつ！！！！」

そう言うと同時に先程までしゃべっていた少年は少女に向かって手に持っていた石をおもいきり投げつける。

石は少女の頭に当たり、少女の頭からはドロリと赤い血が出て、少女は小さく「ううっ…。」とうめいた。

ピキッピシッ

パキンッ

「おい」

その瞬間、芳賀裏の周りの空気が変わった。

「！？な、なんだよ？」

少年達は突然、芳賀裏のまとう雰囲気が変わったことにたじろいだ。

先程までは自分達より明らかに年下のただの少年だったはずだ。

だが、今の芳賀裏はさつきとはまるで違う。

殺伐なんてもんじゃない、とてもおぞましく得体の知れないにかだった。

「気持ち悪いからなんだよ、触ったら腐るから何だ。確かにその子はただの人間じゃないかもしれない。だがなあ、その子もお前らも同じ人間だろうがっ！！」

「う…うるせえっ！だからなんだってんだよお…。」

芳賀裏の気迫に押されるが、少年達は虚勢を張りつつも突き返した。

「お前らは少し違うからといってその子を『化物』呼ばわりしただけじゃなく、酷いことまでした。
だから

【そのこにあやまれ
そしてにとすがたをみせるな】

ゾクゾクゾクツツ!!

「「「ツツツ!...」」」ごめんなさいッ!...!」「」

少年達は少女に謝罪をしたと同時にものすごい勢いで公園から逃げ出していった。

「ふう…とりあえず、大丈夫か？」

芳賀裏は無感情な声に戻りながらも倒れている少女に優しく手を差し伸べた。

「え！？……あ…ああ、うん…」

少女はさっきの出来事とのギャップに驚きつつもゆっくり顔を上げた。

さっきまでは俯いていて見えなかったが、少女の顔はまるで人形のように可愛い、
しかし少女の目はどろどろに腐っているかのように虚ろであった。

そして少女が芳賀裏が差し伸べた手をとった。

その瞬間

グジュルルッ

芳賀裏が差し伸べた手は腐り出していった。

「ひっ…いやあああああっ!!」

少女は自分に触れている芳賀裏の手が腐り出したことに気付いてすぐに芳賀裏の手を振りほどこうとしたが、芳賀裏は手を離すどころ

か、少女の手を強く握り返した。

数秒がたった時、芳賀裏は少女の手から離し

「大丈夫だよ、君の手はもうなにかを腐らせることはない。」

と言い放った。

「えっ？」

少女は芳賀裏の発言に驚きつつも、試しにさつき少女の頭に当たった石を持ってみると

石は腐ることはなく何も起こらなかった。

「えっ、でも、あなたの手は………！？」

自分が石に触っても腐らなかったことに驚愕しつつも少女は腐って
るはずの芳賀裏の手を見た瞬間、

言葉を失った

腐ってるはずの芳賀裏の手が
いつの間にか元に戻っていたのだ。

「……どうして……どうして、腐らせることしかできない腐ったあた
しのために……ここまでしてくれるの……？」

「……………」

「こんなみんなに迷惑をかけるあたしなんて死んだほうがいいのに
……
ねえ、何でよっ……！……何でっ……」

「ほっておけなかったから」

「……………え……………？」

「君をほっておけなかったから。
自分が望んだ能力^{ちから}じゃないのに、その能力^{ちから}振り回されて不幸になる
姿を見たくはなかったから。
…実際俺もこんな呪われた能力^{ちから}で『化物』扱いされたからな。
まあもつとも、『思い通り』にその扱いを無くしたんだがな…」

そう言った芳賀裏の目はさっきまでの無感情さはすでに無く強くそして優しいものであった。

その言葉を聞いて少女は目を潤わせ一気に泣き出した。

「……………う…うわああああんっ…！」

「なっ！どうした！？とにかく落ち着け！」

突然泣き出した少女に芳賀裏は慌てながらも泣き止ませようとする。

「うつ…グスン…こんな…こんなあたしでも幸せになってもいいの…?」

それを聞いて芳賀裏は微笑みながら強く返した。

「ああ、もちろんだ!」

「グスン…ヒック…あ…ありがとう…」

「そっぴやまだ名前を聞いてなかったな。何て名前なんだ?」

少女は流れる涙を拭い

「怒江…あたしの名前は江迎怒江。あなたのお名前は?」

「俺か?俺の名前は御幸返芳賀裏。よろしくな、怒江!」

そう言われた芳賀裏の顔には以前の上辺^{うっそ}も無感情もない、
本当の本音の笑顔があつた。

荒廃した腐花^{ラフラフレシア}が消去されました。

《いやはや、まさか彼がこんなにも早く物語を変えろとは驚いたなあ。流石『二年前』から目をつけたことだけはある。》

一面が白そのものの空間に佇んでいる『男とも女ともとれるその者』はティーカップに入つた紅茶を一杯飲むと、嬉しそうに言う。

《まさか能力を使って過^{マイナス}負荷を消すとはね。さつさと『代わり』を用意しなくちゃね。》

『男とも女ともとれるその者』は目の前に浮かんでいるモニターの中から一人の少女を映すと手前にあるボタンを押した。

《これで良しと。早速手間を掛けさせられたけどその分、面白いものが見れたからいいか。

この先めんどくさいことが起きるかもしれないけど彼に働いてもらうのはもう少しあとになるかな。まあ、それまではこの神様を楽しませてくれよ

ワールドレス
無存現くん。》

そう言つて『男とも女ともとれるその者』もとい、神はティーポットでティーカップに紅茶を注ぎ、香りを楽しみつつゆっくり飲んでいった。

第一話『君をほっておけなかったから』（後書き）

???「ふっふっふっ、

ついに…ついにきたのだな」

???「この私、この小説の作者こと

ていん？がー！のコーナーが始まったのだー！…うわぁっはっはっ
はっはっはっ！…！！」

シーーーーーン

ていん？がー！「……………」

ていん？がー！「…よく考えたら一人でいたんだっただ…。」

ていん？がー！「まあ、そんなことは置いといて…！」

ていん？がー！「この小説の前書きと後書きはていん？がー！ワールドなコーナーとして次話からスタートだ！！」

ていん？がー！「みんなー、この小説ともども応援よろしくな！！
！（みんな応援してくれるかな……？）」

第二話『王子様…ありがとう』（前書き）

ていん？がー！「はいっ、

第一回、『ていん？がー！のワールドン……！』はっじまってるよー

——！……！」

芳賀裏「（ダサッ。）」

怒江「（早くお家に帰りたい。）」

ていん？がー！「よし！早速トークから始めるぜー！」

芳賀裏「おいちよつと待てよ、クソ作者」

ていん？がー！「ん？なんだい、我らが主人公くん？」ニヤニヤ

芳賀裏「（うわ、うぜえ）何で俺達がここにいるんだよ？」

ていん？がー！「えーっと、ほらっこの企画書に
『このコーナーは作者であるていん？がー！とパートナーが進めま
す。』」

って書いてあるだろー！」バンバン

ていん？がー！「さあ、どういつトークをしていこうかなー！！
恥ずかしい話？武勇伝？それとも深い話かなー！！！」

芳賀裏「（キモッ）」

怒江「（怖い…）」

ていん？がー！「さあ、どんなどんなどんな話しようかなー
――！！！」

????「待ちたまえ！」

ていん？がー！「だ、誰だ！？」

後書きに続く。

第二話『王子様…ありがとう』

わたし、江迎怒江は不幸でした。

生まれつき持ったこの能力ちからのせいでわたしの人生はひどく腐り廃れたものになりました。

わたしの手で触ったものはぜんぶ腐りました。

かわいいわんちゃんを抱いたらわんちゃんは腐って死にかわいいねこちゃんを撫でたらねこちゃんは腐って死にお人形さんを持ったらお人形さんは腐って無くなりました。

この能力ちからのせいでたくさんのひとはわたしを怖がり、蔑み、虐げました。

でもおとうさんとおかあさんだけは、怒江の病気は必ず治るから大丈夫だよ、と言ってわたしをたくさん病院に連れていきました。

けど、どの病院に行っても原因はわからないと言われて治すことは
できませんでした。

—この能力が治ることはないのかなあ—

ある日、おかあさんはわたしをある病院に連れていきました。

その病院は異常な子どもを診察していてここならわたしの病気がわ
かるかもしれない、とおかあさんは言っていました。正直もうどう
でもよく思いました。

わたしはいままでたくさんのものを腐らせてきた。

今さらこの能力能力がわかっててもわたしが腐らせてきたものは元に戻るわけでも、わたしがしてきたことが償われるわけでもない。

わたしは人に迷惑な存在。

わたしが何かに触った数だけ腐って廃れて死んで無くなった。

いつかわたしはおとうさんとおかあさんを腐らせて無くすかもしれない。

わたしはいちやいけないんだ

幸せになっちゃいけないんだ。

生きてちゃいけないんだ。

もう死んだほうがいいのかなあ。

異常な子どもが集まるその病院で、わたしは白衣を着たわたしとおなじくらいの先生（？）に診てもらいました。

その先生が言うにはわたしの能力は過^{ひょうき}負^{マイナス}荷という欠点にしかならな
いものだそうです。

ああ、やっぱりわたしは迷惑な存在だったんだなあ。

毎日が腐っていたわたしでもほんの少し希望をもっていました。

それは、運命の出会いです。

前におかあさんに読んでもらった絵本に、ある日一人の女の子の前に白馬の王子様がやってきてその女の子を幸せにした、とありました。

もしかしたら白馬の王子様がわたしを救ってくれるかもしれない、と腐った希望を持ち

白馬の王子様に出会うためにわたしは毎日外に出ました。

しかし、わたしを待っていたのは運命的な出会い（ゆめ）ではなく腐り落ちた現実^{じじく}でした。

わたしが道を歩いているとたくさん的人是わたしを怖がってわたしを避け、離れていきます。

そしてわたしと同じぐらいの子たちはわたしをいじめます。

最初の頃は無視したり避けられていましたが次第には砂や泥、石を投げられたり、殴る蹴るも当たり前になっていました。

また、大人もわたしをいじめてきます。

大人は自分の子どもをわたしから遠ざけたり、わたしのお家の悪口もたくさん言ってきました。

そして最近になってからはわたしのお家にいっぱい落書きがされたりゴミを投げ込まれます。

そうなってしまったのはわたしのせいだと泣いていたとき

おとうさんとおかあさんは、怒江は何も悪くない。今は悪くてもいつかきつと幸せが来るよ、とわたしを抱きながら言っていました。

—こんなわたしが幸せになれるのかなあ—

ある日、いつもよりいっぱい外を歩いていると知らない公園に着きました。

公園の中に入ると、わたしより少し大きな男の子達が楽しそうにボールで遊んでいました。

わたしがそれを観ていると、ボールがわたしのところに転がってきました。

それに気づいた男の子達は嫌そうな顔をしつつも、早くボールをこちに投げてくれ、と言ってきました。

この時、わたしは男の子達がわたしを避けなかったことが嬉しくて、^{マイナス}過負荷のことは頭にありませんでした。

そして、わたしが男の子達に投げ返すためにボールを拾おうとしま

した。

でも、

グジュルルルッ

ボールはグズグズに腐ってなくなりました。

「うわぁ！！ボールが腐った！？」

「おい、もしかしてあいつ噂のあれじゃ……」

「ひっ……化物！！」

それを見た男の子達はわたしを怖がり、いじめてきました。

今日は殴ったり蹴ったりだけじゃなく滑り台やブランコにぶつ
けて血がいつぱい出ていました。

あの時ボールを拾わなかったら、と腐った後悔をしました。

そして男の子達はついに石を持ち出してわたしに投げてきました。

「気持ち悪いんだよつ!!」

ビュッ

ガッ!

いつそ、このまま石を投げられ続けたら死ねるのかなあ
なんて腐った考えをしていると

男の子達が投げる石が急に止まり

「何だよ、お前？」

と、言ったのが聞こえました。

どうやら、わたし達以外の誰かが来たようです。

すると向こうは男の子達に対して、

「俺は御幸返芳賀裏だ。おこがえり はがり

お前ら、その子に何してる？」

とだけ返しました。

わたしは地面に倒れていたので姿は見えませんでした。が、その声から判するにその男の子はわたしを助けにきたのかなあと思いました。何か違和感を感じました。

空っぽ

その男の子の声は、端から聞いたらわたしを心配してくれるようだけど

その声には喜びも怒りも楽しさも悲しみも愛しさも優しさも怖さも
憎しみも何もない

ただ無機質で機械のような音が流れたような感じでした。

「あ？こいつが『化物』だからに決まってるだろ？」

ピキッ

「……………化物……………」

……………え？

今…少しだけ雰囲気が変わった……？

「そうだ、こいつが同じ場所にいるだけで吐き気がする！それにこいつが手で触ったら何でも腐っちまうから気持ち悪すぎんだよっ！！
そのために俺達は『化物』退治をしてるのさ！！
こんな風になっつ！！！」

そう言った時、わたしの頭に硬い石が当たり、頭から血が出てきました。

ピキッピシッ

パキンッ

「おい」

わたしに石が当たった時、その男の子からとてもおぞましい『何か』を感じました。

その『何か』にわたしは息をするのを忘れるくらい怯えていました。

「！？な、なんだよ？」

男の子達も凄んではいるもの、声はとても震えていました。

「気持ち悪いからなんだよ、触ったら腐るから何だ。確かにその子はただの人間じゃないかもしれない。だがなあ、その子もお前らも同じ人間だろうがっ！！」

え！！今なんて…

「うっ…うるせえっ！だからなんだってんだよあ…。」

「お前らは少し違うからといってその子を『化物』呼ばわりしただけじゃなく、酷いことまでした。
だから

【そのこにあやまれ
そしてにとすがたをみせるな】

ゾクゾクゾクツツ!!!

その男の子の最後の言葉は今でも頭にこびりつくぐらいにおぞましく残りました。

もはやどんな言葉でも表せないぐらいに...

「「ッ！……」ごめんなさいッ！」「」

わたしをいじめていた男の子達はその言葉通りに去っていったようです。

「ふう…とりあえず、大丈夫か？」

「え！？……あ…ああ、うん…」

男の子が急に無機質な声に戻ったので少し驚きつつもわたしは顔を上げました。

その男の子は少し白みがかった銀色の髪にかっこいい顔をしていてわたしを心配しているようでしたが、男の子の目の奥は声と同じ空っぽで何も映ってないみたいでした。

そしてすぐに男の子はわたしの手を取りました。

しかし

グジュルルッ

その男の子が差し伸べた手は腐り出しました。

「ひっ…いやあああああっ!!」

そんな…
いやだ、わたしを助けてくれたのに…

わたしはその男の子の手を振りほどこうとしましたが、その男の子は手を離すどころか、わたしの手を強く握り返しました。

そしてすぐに男の子はわたしの手を離し

「大丈夫だよ、君の手はもうなにかを腐らせることはない。」

と言いました。

「えっ？」

わたしは最初は男の子が言ったことがわかりませんでした。

でも、さっきわたしの頭に当たった石を持ってみると石には何の変化ありませんでした。

「えっ、でも、あなたの手は……………!？」

石が腐らなくても男の子の手はもう……

わたしが男の子の手を見た瞬間、
言葉を失いました。

なぜなら、腐ってるはずの男の子の手はいつの間にか元に戻っていたから。

まだ二年しか生きてませんが、ここまで現実離れたことは初めて見ました。

でもなんでこの男の子はわたしのためにここまでしてくれるの…？

「…どうして……どうして、腐らせることしかできない腐ったわたしのために…ここまでしてくれるの…？」

「……………」

わたしは期待してるかもしれない。

「こんな、みんなに迷惑をかけるわたしなんて死んだほうがいいのに……………」

ねえ、何でよっ！！……………何でっ……………」

この人が白馬の王子様なんじゃないなって

「ほっておけなかったから」

「……………え……………？」

「君をほっておけなかったから。」

自分が望んだ能力ちからじゃないのに、その能力ちからに振り回されて不幸になる姿を見たくはなかったから。

…実際、俺もこんな呪われた能力ちからで『化物』扱いされたからな。まあもつとも、『思い通り』にその扱いを無くしたんだがな…」

その言葉を聞いた時、わたしの心に腐り積もっていた呪縛が一気に崩壊しました。

「……………う…うわああああんっ!!」

わたしは泣いていました。
泣いて泣いて泣いて
疲れても泣いてました。

「なっ!どうした!?!とにかく落ち着け!」

「うつ…グスン…こんな…こんなあたしでも幸せになってもいいの…?」

わたしはまだ心に残っていた不安を出しました。

幸せになってもまた、人に迷惑をかけるのではないかと。

男の子はそれを聞いて微笑みながら

「ああ、もちろんだ！」
と、言いました。

そう言った男の子の目はさっきまでの空っぽではなく、とても強く優しいものでした。

「グスン…ヒック…あ…ありがとう…」

わたしはここまで温もりをもらったのは初めてかもしれません。

王子様…ありがとう。

「そういわまだ名前を聞いてなかったな。何て名前なんだ？」

すると、男の子は忘れていたのか、わたしの名前を聞いてきました。

「怒江…あたしの名前は江迎怒江。あなたのお名前は？」

あたしも男の子の名前を聞いてみました。

だってこの先もずっと会いたいから…//

「俺か？改めまして俺の名前は御幸返芳賀裏。よろしくな、怒江。」

わたし、江迎怒江は不幸でした。

しかし、これからは不幸じゃありません。

ある人との出会いがわたしを不幸から救ってくれたから。
ある人との出会いがわたしに温もりをあたえてくれたから。

6月24日

わたしはこの日を永遠に忘れないでしょう。

なぜなら、その日はわたしの運命が変わった日でわたしの初恋の日だから…

ありがとう…そして、大好きだよ芳賀裏くん。

第二話『王子様…ありがとう』（後書き）

ていん？がー！「だ、誰だ！！お前は！！？」

「???」ああ、改めて、第零話に出てきた神様だ。」

神様「ちなみにこのコーナーのパートナーは私のことだよ。
よろしくね。」

ていん？がー！「」

芳賀裏「あつ、もう時間だから家に帰るわ」

怒江「ばいばーい」

神様「さてと、早速このコーナーを始めようじゃないか。

ん？」

ていん？がー！」

神様「ああ、この状態では今回は無理だね。
次回からになるか。」

神様「それじゃあ、次回もこの小説をよろしく。」

第三話『プライバシーまでないようだ』（前書き）

ていん？がー！「……………」ズーン

神様「まあ、いい加減早く立ち直りたまえよ。くよくよしても仕方ないだろう？」

ていん？がー！「……………」

神様「ん？」

ていん？がー！「うるせえ——————！！！！俺だってなあ、他の小説みたいに主人公達とわいわいがやがや舞台裏トークしたかったよコンチクショ——————！！！！！」

神様「ふむ、なるほどね。

要するに、他の小説では舞台裏トークがあるのに自分だけ舞台裏トークができなかったということだ。

それはさぞかし辛かったろうに、でも、もう心配しなくていいよ。」

ニコッ

ていん？がー！「か、神さん…」ブワッ

神様「早速このコーナーを美味しい紅茶の入れ方コーナーとして始めよう。」

ていん？がー！「あんた話聞いてたかあああああ——
！！？」

第三話『プライバシーまでないようだ』

い、いま起こっていることをありのままに話すぜ

俺こと御幸返芳賀裏は未知の局面に遭遇している

こんなことが起こるなんて知らなかったし、思いもしなかったんだ

だが、気づいたら『それ』はすでに起こっていたんだよ!!

と、とりあえず今の状況を整理しよう

?俺は自分の部屋で寝ていた。

？目が覚めた。

今ここだよ！↓？隣を見ると怒江がいて、「はーくん、おはよ。」
とあいさつをしてきた。

ということなんだが、俺はあいさつよりも先に言いたいことがある。

「なんつで俺の部屋にいるんだ——！！！！」

っ……ていうか、それ以前にどうやって俺の家に来た！？

お前に家の場所教えた覚えはないぞ！！！？」

「えー？それはあ、はいくんが大好きだからだよお。」

あれっ？

この子こんなに会話が成立しない娘だったっけ？

いずれにせよ、早く怒江を部屋から出さねば着替えもできん

そう考えている内に助け船がでたのか、母さんがドアを開けて俺の部屋に入ってきた。

「あつ、母s「あらー、怒江ちゃん。芳賀裏を起こしてくれたのね。ありがとう。」」

「いえ、お義母様。未来の妻たるものが夫の世話をするのは当たり前です。」

「うふふ、それもそうねえ。怒江ちゃん、これからも芳賀裏のことよろしくね。」

「『これからも芳賀裏のことよろしくね。』ですって…。それって、わたしとはーくんと将来が約束されたってことなのね。つまり、わたしははーくんの許嫁になったわ。お義母様うれしいわ。さて、そうなったらはーくんが自慢できる最高のお嫁さんになるために早く花嫁修業しなくちゃね。そうと決まればまずは、はーくんの口に合うごはんを作るために料理から始めるわ。お義母様、わたしに料理のことを教えてください。」

「あらあら。」

…なんで、母さんが怒江と仲良いんだ？

いやっ！

というか、怒江が勝手に俺の部屋に入ってきてるのはスルーかよ！？

「母さん、なんで勝手に怒江を俺の部屋に入れてんだよ！

というか、何で怒江が家の場所を知ってるんだ！！？」

「あら、それはねえ、この前お母さんが買い物しに出かけてたらあなたが前に話してた怒江ちゃんに会ってねえ」。

わたし達の家に行きたがってたから、買い物の後家に連れて来たのよ。それに礼儀正しくて良い子だから何回か家でお茶してるの。よかったわねえ、芳賀裏。

こんなにかわいいお友達が家に来てくれて」

「やだ、お義母様ったらあ」。

アハハハハハハハ

…どうやら話を通じないだけじゃなく、プライバシーまでないよう
だ。

ああ、なんだか頭が痛くなってきた……。

ところ変わってそのあと、俺は怒江と外で遊ぶことになった。

俺は怒江を追い出そうとしたが、母さんが、「若い内にこんなにか
わいい子とデートしないと、損よ!」とこれまたややこしいことを
言うし、怒江は一緒に遊ぼうオーラを出すので今に至るのである。

「わあ、はーくんみてみてー!」

ねこちゃんがいるよ」

俺達が道を歩いていると道の端に猫が寝転んでいた。

怒江はとてと猫の方に向かい、猫を抱き上げた。

すると、怒江は無事に抱き上げたのが嬉しかったのかさらに喜んでいた。

「はーくん、このねこちゃんかわいいね」

「あ、ああ、そうだな。」

この猫ふてぶてしい顔してるし、結構ふとってるぞ。
というか、怒江よく抱き上げたな…。

そんなことを思いつつも、気付けば俺は楽しそうに笑っていた。

上辺^{うそ}じゃなく心からだ。

こんなに心から楽しいのは初めてかもしれない。
こんなに心から笑ったのは初めてかもしれない。

あんな『思い通り』の人生にはなんにもなかったからな…

それに、怒江も本当に楽しそうに笑っている。

毎日がどたばたで躊躇なくプライバシーまで破られる日々だが、

…まあ…悪くはない…かな。

俺はそう思いつつ、怒江が抱いている猫の頭を撫でた。

第三話『プライバシーまでないようだ』（後書き）

ていん？がー！「ゼーハー…ゼーハー……。」

神様「全く…何だね、せつかく私が用意した美味しい紅茶100セット（ティーパック、ティーカップ、ティーポットそれぞれ100個ずつ）を片付けるなんて。」

ていん？がー！「いや完全にあんたの趣味じゃん！？」

神様「はあ…私はだね、他にはない斬新なコーナーを作りたいんだよ。」

ていん？がー！「そんなこと言ってもなあ…」

神様「それより、さつきから否定するだけで君は何かあるのかね？」

ていん？がー！」「う…いや…俺はただトークを…」

神様「それだと読者が飽きてしまうからこうして新しいコーナーを考えているのだよ、言ってることがわかるかい？」

ていん？がー！」「うん…」

神様「返事は、はい」

ていん？がー！」「…はい」

神様「いいかい、ありがちなコーナーをやるだけでは読者は飽きてしまう。さっきの紅茶のように、まず誰もがやらないようなことを始めることが大切なんだ。つまりは、初めは拒絶されるが辛抱づく、そして工夫を続ければそれだけ読者の心をウンヌン…」ペラペラドクト

ていん？がー！」「……………」セイザサセラレテイル

このあと一周まわって舞台裏トークをやることになりました。

第四話『むしろ嬉しい』（前書き）

ていん？がー！「ていん？がー！プレゼンツ！クリスマスだよ、俺
最スペシャル〜！！！」パチパチパチ

神様「わー」パチパチパチ

神様「と、これは置いというて質問いいかい？」

ていん？がー！「ん、何すか？」

神様「クリスマスはもう過ぎてるし、もうすぐ正月だろう？」

ていん？がー！「」

ていん？がー！「ていん？がー！プレゼンツ！クリスマスと正月だ
よ、俺最スペシャル〜！！！」

神様「流したね……」

ていん？がー！「さて！この企画ですが、今日から何と毎日この小説を投稿するていん？がー！のクリスマスプレゼントかつお年玉なのだ……！！」バ——ン

神様「…まあ、クリスマスにしても正月にしてもシヨボイが今までの更新頻度から考えるとまだマシか」

ていん？がー！「そうでしょ！では時間もないのでどづぞー……！」

第四話『むしろ嬉しい』

春爛漫の季節

桜の花が舞い散る今日この頃

世間では入学式などの行事で賑わっている中、その波に乗り掛かろうとする子供が二人いた。

「はーくん、はやくはやく」

「ちよつ、待てよ怒江！幼稚園の入園式までまだ二時間もあるからゆっくり準備させてよ！ていうか、当然のように勝手に俺の部屋に上がり込むなよ！！これはもう完全な不法侵入だぞ！！！！
せめて玄関で待っとけよ！」

そう、実はこの二人はもう三才になったので、今日幼稚園に入園することになったのだ。

もともと芳賀裏には友達がいたとはいえ、それは『思った通り』のものだったため、幼稚園では『思った通り』ではない新たな出会いにわくわくしており

一方、怒江はというと、自分の過負荷^{マイナス}により人との関係が持てなかった為、幼稚園で芳賀裏以外の子供と遊ぶのが楽しみで仕方がなかった。

だからこの二人は今日の入園式をとてもしみにしていたのだ。

「さあ、みなさん

まずは自分のお名前を言っていきましょうね」

「「「「は——い!」」」」

「…ああ、なんだか緊張してきたなあ。」

実際芳賀裏はこういった場には初めて立つので、緊張してしょうがなかった。

だが、そうこうしているうちに順番が芳賀裏のところまできた。

「えー、おこがえりはがりです。
よろしくな。」

「あたしはえむかえむかえです！
みんなよろしくね」

「わ…わたしのなまえはおにがせはりがねです。
よ、よろしくおねがいます。」

「ぼくのなまえはひとよしぜんきちだよ—！
よろしくね—！」

「私の名は黒神めだかだ。
よろしく頼むぞ。」

……ん？

なんか、幼稚園児ではまずありえないような紹介が聞こえたぞ

その声がした方を見ると

紫色のおかつぱだが将来は絶対的な美人になるぐらいに整った顔をした少女がいた。

だが少女が放つオーラ？はもう上から目線というか、無意識というか必然的に人の上に立っているようだった。

・お絵かき

先生「あらあ、善吉くんは何を書いているのかな？」

善吉「ん〜とね、ワンちゃん！」

先生「まあかわいいわねえ。

針金ちゃんは何を書
いてるのかな？」

針金「え、えつと、お巡りさんです！」

先生「あらあらお上手ね」

針金ちゃんは大きくなったらお巡りさんになりたいのかな？」

針金「はい！お巡りさんになって悪い人を捕まえます！」

先生「針金ちゃんなら絶対なれるわよ♪」

…それでめだかちゃんは何を書いているのかな？」

めだか「うむ、好きなものと言われたから私は七福神を書いたぞ！」

先生「（なんで！？）へ、へえ…なんでめだかちゃんは七福神が好きなのかな？」

めだか「それはだな、私は七福神の中で特に福祿寿と寿老人が好きでな、道教を強く追求したと言われていて私は道教の考えが興味深いものだから好きだ。ちなみに福祿寿と寿老人は同一人物という説があつてな…」

針金「ながすぎですよ！！！」

・お昼休み

女子A「ねえねえ、むかえちゃんのおべんとつみせて」

怒江「うん、いいよ！」

女子B「わっ、かわいい」

怒江「これ、わたし一人で作ったんだよ」

女子A「えっ、すごいじゃん！」

女子B「むかえちゃん、このたまごやきとたこさんウインナーこうかんしょ」

怒江「ダメッ！！！」

女子A B「ビクッ

怒江「このお弁当はわたしとはーくんの愛の結晶なんだよ！だから
はーくん以外が食べるなんて許せないよ。この卵焼きは九州の宮崎
県まで行って取った特産地鶏の卵から作ったのよ。ふふっ、わたし
が一生懸命作ったお弁当をはーくんが食べないはずないわ。さあ、
はーくん一緒にお弁当食べましょう。」

芳賀裏「（見つかったらやられる見つかったらやられる見つかった
らやられる見つかったらやられる見つかったらやられる見つかった
らやられる）」ガクガクガクガク

「さあ、みなさーん！

最後は鬼ごっこをして遊びましょっねっ！」

「「「「「「「は——い——！」「」「」「」

先生はそう言うとかじ引きを取り出し、みんなにくじを引かせた。

ちなみにくじの結果は

俺、善吉、針金、あと他三名が鬼で、それ以外（20人ぐらいかな？）が逃げる役になった。

「き、きょうはよろしくおねがいします。ひとよしくん、おこがえりくん。」

「まあ、そんなに硬くなるなって
気楽に楽しんでいっつぜ、針金」

「は、はい！」

「針金ちゃん、よろしくねー」

俺たちが少し話している間に鬼ごっこは始まった。

開始から約2分

20人近くいた園児たちはめだか、怒江、その他二人を除いたほぼ全ての園児を芳賀裏一人が捕まえた。

元々芳賀裏は『思い通り』にしていたとはいえ、運動神経や頭脳面は同級生のそれを遥かに越えていた。

さらに目を重ねることにその才能は^{スベック}どんどん上がってきていて大人も目を見張るものになってきている。

この結果から芳賀裏はまた『思い通り』を思い出してしまった。

鬼役の善吉や針金は

「はがりくん、すごいーい！」

「す、すごいですー！」

と素直に芳賀裏を誉めていて他の園児たちも誉めていたが

芳賀裏にとっては『つまらない』ものでしかなかった

少なくとも他の園児よりは張り合いのあるものがいれば、と思いつつも芳賀裏は怒江とその他二人を捕まえて残るは黒神めだかただ一人となった。

ああ、こいつもすぐに捕まえて終わりになるだろう、と芳賀裏は残念に思った。

事実、黒神めだかと芳賀裏の距離は１メートルもなかった。

所詮こいつも他のやつらと同じなのか、とため息を吐くと、芳賀裏はめだかを捕まえるために手を伸ばした。

だが

!!!!!!!!!!

俺はあるはずの感触を確かめたが、それはいつまでたってもこなかった。

手を伸ばした先を見ると黒神めだかはどこにもいなかった

どこにいった…？

やつを探すために後ろを振り替えると、俺は目を見張った。

なんと黒神めだかはすでに5メートルも離れたところにいたのだ。

「お前…何をした？」

「なあと、貴様が手を伸ばした瞬間、体を捻らせて走っただけだ。」

と黒神めだかは背景に凜！とつくぐらいに清々しく答えやがった

簡単に言ったが、そんなもの普通の幼稚園児ができるはずはない、いや、できてはならない。

だが

そうこなくっちゃ楽しくないぜ

鬼ごっこもあと残り5分となったが、依然として芳賀裏がめだかを
追い回していた

その光景はもう追い回すよりも
芳賀裏の攻撃にめだかが避け続けているという感じだった。

そして周りかというと

「はがりくん、がんばれー！」

「めだかちゃんもまけるなー！」

「二人とも頑張ってくださいー！」

と、園児だけでなく先生も二人を応援していた。

「やっぱりーくんもすごいけど、あのめだかちゃんって子もすごいねえ。」

「うん！めだかちゃんは何でもできるんだよー！」

「ふーん、でも勝つのはやっぱりーくんかなあ。」

「そお？めだかちゃんも負けないと思うよお？」

「んー、見てたらわかるよお。」

まさか、ここまでやるとはな

やはり、あの雰囲気は伊達じゃなかったってことか

『思い通り』を壊してくれて感謝するぜ、黒神めだか

いや、めだか

俺は礼をもって次で終わらせる！

その瞬間、芳賀裏はめだかとの距離を一気に詰めた。

めだかはすぐに避ける体制にはいつたが

!!!!!!!!!!

めだかを捕まえようとしていた芳賀裏が消えたのだ

めだかは芳賀裏を探すために後ろを振り替えろうとした

が

「ここだよ」

その声と同時にめだかの肩に手が置かれた。

めだかがそのまま振り替えると

そこには消えたはずの芳賀裏がいた。

「貴様、どうやって姿を消した？」

「いやあ、消えるもなにもただ俺は『お前のまね』をして後ろにまわっただけだよ。」

その瞬間、黒神めだかの本能は悟った。

この男は私と同じ、いや、私以上だ

だが、悔しくはなく、むしろ嬉しい。

自分を負かせるものが現れたから

「これからもよろしくな、めだか」

「ああ、こちらこそよろしく、芳賀裏」

二人は互いにかっちりと握手をした。

次の日から怒江に加えてめだかと善吉と遊ぶようになったが、

「あなたたちをほっておくと、なにかやらかす気がします！」

なぜか針金もついてくるようになったのである。

第四話『むしろ嬉しい』（後書き）

ていん？がー！「さあ、今回四話に登場した鬼瀬針金ちゃんですー！」パチパチパチ

針金「ど、どうもです」

神様「ちよつと、ちよつと待ちたまえ」

ていん？がー！「も、何すか？」

神様「なぜ勝手にゲストを登場させている？」

ていん？がー！「え？そりゃあスタッフが用意したからでしょ？ADそうでしょー！」

A D「チガイマスチガイマス

ていん？がー！「マ、マジか！？」

まあ、そんな固いこと言わずに熱く語り合おうぜ」針金ちゃん
ウデワキワキ

針金「ひ…た、たすけて」

神様「ピッ、プルルルル

神様「もしもし、天界警察かい、私だ。

今スタジオに幼女を襲う変質者がいるのだね、すぐこれるかい？
30秒でいけるのか。

え、抵抗したら？

もちろん発砲許可を出すよ、出来るだけすぐに来てね。」ピッ

第五話『幸せになりについて…』（前書き）

ていん？がー！」「ボロッ

神様「全く…。何かの間違いで来たとしてもくれぐれも『間違い』だけは犯さないでくれよ。」

ていん？がー！」「は…はい…。」

神様「はあ…。おっと、もう休憩時間じゃないか。早くしないと白組の長渕剛が始まってしまう。」

それじゃあていん？がー！くん、罰として後の進行はよろしくね。」
スタスタスタ

ていん？がー！」「えっ…ちよっ！？

…俺怪我人だし、ガキ使見たいんだけどなあ……………

それではVTR、ゴー!!（松っちゃんのまねで）「

スタッフ一同「（似てね）」

ていん?がー!「コラ——!!」

今失礼なこと考えただろ!!」

第五話『幸せになりにって…』

ぽかぽかと降り注ぐ5月ののどかな陽射し

窓の外に耳を澄ませると聞こえてくる鳥たちの豊かなさえずり

わたくし、御幸返芳賀裏は最高の目覚めを体験できそうです。

え？それはなぜかって？

はっはっはっ！

じゃあそんな君に特別に教えてあげよう！

それは

部屋のドアに内鍵（チェーン付き）をつけたからさ——！！

こうしておけば、もう怒江は俺の部屋にはもう勝手に入ってはこれまい——！！

ああ……最初からこうすればよかったじゃないか

ほんと……俺って……馬鹿……。

まあ何はともあれ俺のMorningはvery Goodにカット
ピンピングだぜ——！！

サヨナラ不法侵入！

ようこそ！マイプライバシ——！！！！

は——はっはっh「はーくん、何で一人で笑ってるのぉ？」

.....は？.....

「ちっぱり、やめたほうがいいですって〜」

「わー！おもちゃがいっぱいだ——！」

「おお、起きたか芳賀利。今日は清々しい朝だな。」

「……ミナサン、カギヲカケタノニドウヤツテハイツテキタノデスカ？」

「うんっ！それはねー！めだかちゃんがぴっきんぐしたんだよ——！」

「うむ、あの程度の錠前は昔解いた20面ルービックキューブよりも簡単だったぞ。」

ふほうしんにゆうがあらわれた。

はがりはどうする？

・たたかう

↓・どうぐ ↓うちかぎ

・にげる

はがりはうちかぎをつかった。

はがりのぼうはんりよくがあがった。

ふほうしんにゆうはなかまをよんだ。

ピッキングがあらわれた。

ピッキングのこうげき。

はがりは９９９ダメージを受けた。

はがりはたおれた。

G A M E O V E R

「めだかの家に遊びにいくう？」

「うんっ！そうだよー！」

「んっ確かにめだかちゃんの家に行ったことないね」

「ド、ドキドキします…」

「よし、それじゃあ私の家に行こうではないか！」

「いや、俺行くとは一言も言ってねえし！！」

ピッ

「もしもし、すぐにへりを頼む。」

……………はい？

「お前今何て言った？」

「うむ、すぐにへりを頼む、と言ったぞ。」

……はい？

そしてへりに乗ること30分

へりが目的地に降り立った。

周りを見るとそこは見渡すかぎりの雄大な平原が広がっており、め

だか曰く、庭の一部だそうだ。なんと恐ろしいことが

そして前を見てみるとそこにはもはや城と呼べるものが建っていた。

その城の前まで行くと、そこには途方もなく長いレッドカーペットと百人以上はいるであろう使用人さんとメイドさんが

「「「「「「「お帰りなさいませ、お嬢様！」「「「「「「

と一斉に頭を下げた。

「それに対してめだかは「うむ、ご苦労。」と言い

悠然とレッドカーペットの上を歩いていった。

怒江、善吉、針金は目を輝かせていたが
俺はあまりの驚きの連続にポカンと突っ立っていた。

うん…現実ってなんなんだろう…

そんなこんなで俺達は城の中に入り、出迎えてくれたメイドさんの1人にめだかの部屋まで案内してもらった。

そこもやはり広く、俺の家がすっぽりと入るぐらい広かった。

ははっ、格差社会だね♪

それから俺たちはめだかの部屋で様々な遊びをした。

そこには、パズル、ジグソーパズル、将棋、チェス、オセロなどのおもちゃが数え切れないほどあり

俺たちが人生ゲームで遊んでいると

ドアのほうから、ドドドドドッ、とものすごい音がして俺たちは何事かとドアのほうに耳を傾けた。

こっちまでいやになるぐらい嫌悪感丸出しのめだかを除いて…

すると程なくしてドアがバンツ！と開き、俺たちより少し大きくて腰まである紫色の髪で結構整った顔をした少年が

「めだかちゃ〜ん！！おかえ」 「フン！！」 「グボアツ！！！」

めだかに抱きつこうとしたが

めだかの殺意MAXパンチを見事に食らい、外の廊下の壁にめり込んだ。

その一部始終に怒江、針金は当然怯えて泣き出した。

めだかさん

幼稚園児にそんな「ピ——」なものを見せてはいかんよ。

俺は、同じあれを見ても全然平気だった善吉にさっきの少年が誰なのかを聞いてみた。

「さっきのひとはまぐろさんで、めだかちゃんのおにいさんだよー！」と元気いっぱいに答えた。

なるほど、あれがめだかの兄ちゃんかあー。

第一印象は色々残念な人だなマル

しばらくして怒江がトイレに行きたいと言ったが、この広大な城の

中で迷ってしまうかもしれないので俺が付き添うことになった。

……あれ？俺よりこの城に住んでるめだかが行ったほうがよくね
！！？

そう気付いた時にはすでに遅く、怒江がニコニコ笑いながら幼稚園
児とは思えないぐらいの力で俺の手を握っている。っていうか、爪
！爪食い込んでるって！？

そしてトイレを探しているのだが

やっぱり広いつー……！

こんなに広いとマジで遭難するんじゃない？

そう思いながら廊下を歩いているとほかとは明らかに違う扉を見つけた。

俺はそこがトイレだと信じてその扉を開けた。

しかし、そこはトイレではなく見渡す限りの本棚がある図書館がある空間だった。

俺と怒江がその光景に呆然としているとその部屋の奥で机に座った少女を見かけた。

俺たちはトイレのことを聞こうと少女の近くまで行くと、その少女は気付いたのか、こっちを振り向いた。

少女は紫色のショートヘアで目付きは悪いが、それを覆すほど整った顔を持っていた。

しかし、少女の手足には鎖が結び付けられており、さらに部屋には電気がついておらずに机の電気だけで勉強をしていて、周りにはおびただしい量の本や壊れたトロフィーや破れた賞状が転がっていて

それで彼女は異常だとわかった。
アブノーマル

すると少女は

「…何だ、てめえらは？」

とギスギスした口調で聞いてきた。

「俺の名前は御幸返芳賀裏、そしてこっちが江迎怒江、めだかの友達だ。お前の名前は何だ？」

「…黒神くじらだ。」

「何でお前はそんなに勉強してるんだ？」

「何でそんなに勉強するだあ？そんなの決まってるじゃねえか。天才になるためだよ！」

「たとえ天才になるにしてもそこまでする必要はないだろ」

「はっ、馬鹿かてめえらは！」

天才になるためには華やかで恵まれちゃならねえ！

だが不幸になれば天才になり得る！

恵まれた生まれ、恵まれた容姿、恵まれた才能、恵まれた環境！

こんな恵まれた人生じゃ私は駄目になる！

素晴らしいものは地獄からしか生まれない！過去の偉人たちの多くは不遇な人生を送っていて

偉大な発見は大抵劣等感から生まれている！

だから私は幸せになっちゃいけない！

幸福になるぐらいなら死んだほうがマシさ！！！！」

なるほどな、確かに歴史上の偉人の大半は不幸な人生を送っていた。しかしな…

芳賀裏が口を開こうとしたとき

パチンッ

小さく乾いた音が本だらけの部屋に響いた。

見ると、怒江がくじらの頬をはたいたのだった。

「幸福になっちゃいけない？ふざけないで！世の中には幸せになるうとしてもなれない人たちがたくさんいるんだよっ！！確かに昔の偉い人たちは不幸から偉大な発見をしたかもしれない…

でもそれはたまたま不幸だっただけだよ！どんなに不幸でもどんなに幸福でも身近な疑問を追求していったから偉大な発見をしたただだよっ！それに死ぬなんて簡単に言わないで！命はそんなに軽いものじゃない！

不幸を求めてもその先にあるのは不幸だけなんだよ！

だからお願い！

幸せになりについて…」

そう言っただけ怒江はボロボロと涙を流しながら、くじらを強く抱きしめた。

「確かに怒江の言った通りだ。

それに、素晴らしいものは地獄からしか生まれないってのも違うな。

そんな考えが通つたら、今の技術は遥かに進歩しているはずだ。
素晴らしいものは天国だろうが地獄だろうが努力をしたやつと生まれながらの天才から生まれる。

これを見る限り、お前は生まれながらの天才だろう。
それに努力もしている。
それだけで充分さ。

ただ、あまり頑張りすぎるな。
よく食べて、よく遊び、よく寝て、色んなものに触れることが大事だと俺は思っぜ。」

そう言つて俺はそこら辺にあつた数枚の紙切れにサラサラと書いて机の上に置いた。

「俺みたいなやつでもこのぐらいはできる。ましてやお前はそれを優に越えるだろうな」

「……………」。

そう言って俺は扉のほうに足を向けた。

怒江は、今度一緒に遊ぼうね、と笑顔で言っ
て芳賀裏に付いていった。

「不幸を求めてもその先にあるのは不幸だけ、
幸せになりなさい。」「

くじらはそう呟きながら何気なしに芳賀裏が
書いた紙切れを見た。

！！？

そこには難解な計算式がびっしりと書かれていた。

「あいつ...」のぐらいつて...」

くじらは微笑みながら席についた。

次の日から、くじらは外に出て遊ぶようになった。

ただ

「だーからあ、何で朝から勝手に俺の部屋に入ってきてるんだよ
！」

「そんなの、てめえが遅くまで寝てるから悪いんだろ！なあ、怒江ちゃん。」

「うん！はーくん、ちゃんと早起しなきゃだめだよ。」

内外構わず、ほとんど怒江と一緒にいるようになった。

第五話『幸せになりについて…』（後書き）

神様「いや、剛も良かったけど

白組の坂本冬美も良かったな。」ホクホク

ていん？がー！「ガキ使見る前に休憩が終わった……」ドンヨリ

神様「まあまあ、こんなこともあるつかとあらかじめガキ使は録画しておいたから
後で一緒に見ようね。」

ん？なにになに……

ていん？がー！くん、今回は正式なゲストが来ているそうだよ。」
カンペミル

ていん？がー！「マジのマジで！？」

そ、それじゃあ、やるよ。

今話のゲストは黒神くじらちゃんです！！！！」

くじら「よろしくな。」

神様「さて、最初の質問だが

くじらくんは何故芳賀裏くんじゃなくて怒江くんに惚れたんだい？」

くじら「ほ、惚れたとかそんなんじゃないやねえよ！！！！

ただ…芳賀裏よりも怒江ちゃんの言葉が身にしみたというかなんというか……
って、何言わせんだ！！」ガ――

神様「はっはっは（笑）」

さて、時間がなくなってきたからもうそろそろ終わりにしよう。」

くじら「えっ!?!」

ていん?がー!「いや!まだ質問一つしかやってないんですけど!?!」

神様「…君は次話の書き溜めを用意したのかね?」

ていん?がー!「ギクッ」

神様「プロデューサー、彼はもう用意したのかね?」

プロデューサー「シテナイデス

神様「ほら、そういうことだからせめてこの小説を見ている読者に今年最後のあいさつをして締めくくろう。」

くじら」お、おう。」

ていん？がー！」「そ、そうだな。」

ていん？がー！」「それでは皆さん！」「

一同「来年は良いお年を！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1632x/>

俺達と私達の最幸な世界

2011年12月31日23時46分発行